

がん専門医に聞く

富山労災病院 外科部長 **吉本** よしもと **勝博** かつひろ



－ 胃癌について (1) －



わが国では胃癌にかかる患者さんが非常に多く、最近のデータではその罹患数（病気にかかる患者さんの数）は男性で第1位、女性では乳癌に次いで第2位となっています。またその死亡数（胃癌でなくなる患者さんの数）に関しても少しずつ減少傾向にあるとはいっても依然として高く、男性、女性ともに肺がんに次いで第2位となっています。ただし、たとえ胃癌と診断されても早期に発見できれば完治することも可能ですので、なにはともあれ早期発見、早期治療が大切ということになります。

そこで、今回は胃癌の症状と診断についてお話しさせていただきます。

胃癌は初期の段階では無症状のことが多く、胃炎や胃潰瘍などによる症状で内視鏡検査を受けた場合あるいは健康診断でたまたま見つかる場合がほとんどです。癌が進行してくると、痛みや吐き気、嘔吐（特に黒色物）、黒色便などの症状がでてくるともありますが、かなり進行した状態でも無症状である場合も少なくはありません。

胃癌の診断に関しては、現在でも胃癌検診として胃透視が行われていますが、やはり何と云っても内視鏡検査に勝るものはありません。胃透視は胃の形の変化をとらえることによって癌を見つけ出すものですが、ある程度進行してからでないといつては困難です。それに比べ内視鏡検査は病変を直接観察できるため、より早期の段階で見つけることができ、また同時に組織をつまんで病理（顕微鏡）検査に出すことにより病変が本当に癌であるかどうかを判断することが可能となります。



そして胃癌と診断された場合に問題となるのが転移（飛び火）です。胃癌の転移は主にリンパ節転移、血行性転移（主に肝臓や肺など）、腹膜播種（お腹の中に癌がちらばること）があり、CTやPET検査などで調べることができます。

次回は胃癌の治療についてお話しさせていただく予定です。